

物語文と論説文

子どもの受験勉強で知ったこと

今から7年ほど前のことです。子どもが解いている中学受験の国語の試験問題を何気なく見ていたとき、あることに気づきました。それは、問題の元になっている引用文には大きく2種類あるということです。

一つは、児童文学や小説からの引用によるもので、主人公の体験や心の葛藤などをきめ細かく描いたいわゆる「物語文」です。そしてもう一つは、物事の是非を論じたり解説したりする「論説文」です。

小説など、物語文の目的の一つは、読者に感情移入させることでしょう。読者は自分を物語の登場人物に投影させ、感情の起伏を楽しむのです。主人公が涙すれば、自分も同じように涙し、主人公

夫婦や友人間の会話で「どうも話がうまくかみ合わないな」と思ったことはありませんか？その原因は相手の話が何を目的にしたものなのか理解できていないところにあります。今回はそんなささいな行き違いの本質を探り、聞き上手、話し上手になるためのポイントをお話したいと思います。

が成功を収めればそれを自分のことのように喜ぶ、そして読み終わったあとに深い感動に包まれる、これが物語文の醍醐味です。

従って、物語文を題材にした国語の試験問題は、「ここで○○君が涙を流したわけは次のうちどれですか」とか「ここで○○さんの気持ちを次の中から選びなさい」といった感じになります。

他方、論説文の目的は、著者の考えを読者に伝え、読者を説得することです。そこで重視されるのは著者の論理構成であり、説得のテクニクでしょう。論説文の中にはあえて難しい言葉遣いや難解な表現を用いた悪文もあって、読者を手こずらせます。

こうした論説文を問題文にした場合、設問としては「著者の言いたいことは次のうちどれか」だっ



中島 隆信 なかじま たかのぶ

経済学者。慶應義塾大学商学部教授。専門は応用経済学。1960年生まれ。83年慶應義塾大学経済学部卒業、01年同大学博士号(商学)取得。01～07年7月、09年～慶應義塾大学商学部教授、07～09年3月内閣府大臣官房統計委員会担当室長。

寺、障害者、「オバサン」、刑務所といった、経済学とは一見縁遠いと思われる対象を、経済学の視点から一般向けに論じた著書多数。また、「大相撲の経済学」を著すなど大相撲にも造詣が深く、大相撲野球賭博問題を契機として設置された日本相撲協会「ガバナンスの整備に関する独立委員会」の委員に就任し、副座長として年寄名跡の売買禁止などを内容とする相撲協会改革案についての意見書を取りまとめている。

たり、論理構成の理解を確認するため接続詞を選ばせる問題だったりします。出題者は解答者の理解度を問うているのです。

私は遊び半分でこれらの問題を試しに解いてみたのですが、どうも論説文に比べて物語文の出来がよくないのです。その理由はどこにあったのでしょうか。

それは私の物語文の読み方に原因がありました。つまり、出題の意図に反していたのです。先にも述べたように、物語文は読者を物語の中に引きずり込むのが目的ですから、問題に解答するときにも主人公と同じ気持ちになって考えなければなりません。

ところが私は「〇〇君が涙を流す理由」を答える前に、引用文を読みながら「こんなところで〇〇君が涙を流すのは理解できない」とか「泣く前にもっとやるべきことがあるのではないか」などと考えてしまうのです。これでは出題者が求める解答が導き出せなくて当然です。

こうして私は国語の試験問題を通じて物語文を論説文的に読むことの失敗を学んだのです。

「で、結論はなに？」

2007年4月21日付けの『日本経済新聞』に「夫に言われて傷ついた一言」という特集記事が掲載されました。その第9位に「で、結論はなに？」という一言がランキンしています。記事によると、「男性は報告や結論を求めて話すが、女性は過程

に重点を置くので結論はなくてもよいことが多い」ことがその一言の原因と書かれていました。

この説明をさらに掘り下げると、先の物語文と論説文の違いに行き着くと思います。話し手が男性か女性かはさておき、基本的に物語文には結論はありません。その理由は明らかです。なぜなら、結論を聞き手に伝えるのが目的ではないからです。

物語文では、話し手は聞き手に自分と同じ気持ちになって話に共感してほしいと願っているのです。別に結論を相手に伝え、その論理をめぐって聞き手とディスカッションしたいわけではありません。

たとえば、妻が子育てをめぐって夫の母親（姑）から、「もっと勉強させなさい」とか「あまりお菓子ばかり食べさせないように」などとあれこれと注文をつけられたとしましょう。それが仮に正しいことであっても、いや正しいことであればこそ、妻は、「そんなことは言われなくても分かっているわ！」「分かっているもうまくいかないのが子育てなのよ！」と腹立たしさを感ずるかもしれません。

さて妻はそうした鬱憤を仕事から帰宅した夫にぶつけるでしょう。「今日、お義母さんから電話があったのよ」「〇〇（子どもの名前）のことでいろいろ説教されちゃったわ」「そんなこと言われなくても分かっているんだけど」などなど、妻の話は延々と続きます。

さて、話を聞いていた夫は終わりの見えない妻の話にしびれを切らし、内容が一段落した頃合いを見計らって「で、結論は何？」の一言を発するのです。

話している妻にしてみれば、聞き手に伝えたい結論めいたものがあるわけでもなく、夫に自分のやるせない気持ちを分かっただけで、共感してほしいという一心ではないでしょうか。これは典型的な物語文です。他方、夫はいつまでたっても妻の言いたいことが見えてこないで、「早く結論を話してくれよ」ということになります。つまり、このよくある夫婦の食い違いは妻の物語文を夫が論説文として聞いてしまったことに最大の原因があると解釈すべきなのです。

男たちの物語文

物語文を話すのは女性に限りません。たとえば、「居酒屋のサラリーマン」たちが一杯飲みながらしゃべっている内容の多くは、物語文ではないでしょうか。職場での人間関係や家庭内の問題などがテーマだとすれば、別に結論を求めてディスカッションをしているわけはありません。仲間同士で愚痴を言い合い、お互いに慰め励まし合っているだけです。

たとえば、これらの話題に対して論説文的に対応するとどうなるでしょうか。「最近上司とうまくいかないんだ」↓「それなら別の部署に移ればいいじゃないか」、「妻に小遣いを減らされた」↓「増やしてもらえよう奥さんと交渉してみたらどうか」、「妻と姑の間がうまくいかなかった」↓「おまえが間に入って仲を取り持ってやるべきだ」などなど。これで話は弾むでしょうか？

この場合の正しい対応は、「大変だな。おまえの



そんなとき、多くの人たちは物語文的な対応になりがちです。

たとえば、「○○の問題は深刻だよな」と話を切り出した人は聞き手に何を期待しているのでしょうか。「本当だな、△△の問題もあるしな」とか「政治家にもっとしっかり考えてもらわないと困るわね」などという返事で満足しているのであればこれは物語文です。居酒屋の愚痴と何ら変わりありません。それに対して、具体的に実効性のある解決方法を見い出そうと皆で知恵を出すなら論説文的な対応になるでしょう。

私たちは普段の会話でどのような対応をしていますか？

わが家の会話から

最後に私の家ではどのような夫婦の会話になっているかを紹介しておきましょう。

私は経済学者者ですので、日ごろから接するのはどうしても論説文が多くなります。そのため、妻の話が物語文であったときの対応がまずく、そのことが原因となってこれまで幾度となく失敗を重ねてきました。

ところが、先に述べたような物語文と論説文の違いを解明し、その正しい聞き方について夫婦で理解を深めてからはこの手のトラブルは一切なくなりました。

たとえば、これから話す内容が論説文であったときには、「結論から先に言うけど」と話すように

します。論説文の場合、長々と経過を話すと聞き手をイライラさせることがありますので、これは事前の対処となります。

他方、聞き手に共感してほしい話のときには、「物語文だけどね」と最初に断ってから話を始めます。もちろん、そんなことを言われなくても聞き手が察知すればいいのですが、話し手サイドにもちよつとした工夫があれば、よけいな摩擦を防ぐことができます。

ここで避けなければならないのは、物語文であるにもかかわらず結論は何かと考えながら聞くことです。なぜなら、このような聞き方をすると、話の途中を聞き流してしまうことがよくあるからです。聞き手にしてみれば知りたいのは結論なので、途中のプロセスはどうでもいいと思ってしまうます。ところが、話し手はプロセスこそ注意深く聞いてもらいたい、感情移入してほしいわけです。他のことを考えながらいい加減に肯いていたりすると、「あなた、聞いてないでしょ」「いま私が何て言ったか言ってみて」と質問され、険悪ムードになります。もつとも物語文を話すのであれば、話し手には聞き手を惹きつけ飽きさせないだけの表現力も要求されるのですが。

夫婦それぞれのやり方がいいとは思いますが、みなさんも円満な夫婦関係を維持するための方法の一つとして話の聞き方について考えてみてはいかがでしょうか。